リハビリテーション科学部 理学療法学科編

卒業生訪問

2013年4月開設のリハビリテーション科学部の1期生、渡邊さんを訪ねました。臨床活動と研究活動の双翼で、もっと高く、もっと遠くへ、羽ばたきの力強さが日に日に増す卒後7年の理学療法士です。

イムス札幌消化器中央総合病院
渡邊 康介さん（リハビリテーション科学部理学療法学科2017年卒業）

外来・病棟、訪問リハも。

渡邊さんは、消化器領域を中心に15の診療科、183の病床を有するイムス札幌消化器中央総合病院のリハビリテーション科の主任です。午前中はリハビリテーション室で外来及び入院患者さんのリハビリテーションを4人担当、午後は併設する訪問リハビリテーション事業所の利用者さん宅を2軒訪問、夕方は管理業務、委員会活動、科内や他部門との会議などに充てるというのが1日の流れといいます。同院で活発な委員会活動では、現在入院患者さんの安全な生活のために転倒・転落対策防止チームに参加し、リハビリテーションの責任者として立案を担っています。

「かっこいい」がきっかけ。

ご本人いわく「まじめな学生じゃなかった」渡邊さんは就職後に理学療法、リハビリテーションの面白さに出会いとりこになったようです。「1年目にとてもお世話になった、臨床と研究を両立させる先輩がかっこよくて、単純な憧れから学会に参加してみた」と言い、学会のアカデミックな雰囲気とリハビリテーションに真正面から向き合う発表者の姿に触発され「研究のケの字もなかった」はずが、翌年にはさっそく自らが学会での発表に立っていたそうです。「振り返ると冷や汗ものの発表でしたが、それ以来学会発表を自分に課し実行することで、自身の成長を実感しています」。物おじしない姿勢で、渡邊さんは次々と新たな扉を開いてきました。

2019年から学会発表を続け、2023年には2回発表、2024年は「可能なら3回発表したい」と意気込みます。写真は2023年秋の日本予防理学療法学会での発表。

同院リハビリテーション科に在籍する理学療法士、作業療法士、言語聴覚士総勢45人の3分の1が本学卒業生。とくに2020年以降は毎年採用者の半数以上を占めるそう。もちろん、訪問リハビリテーション（写真）、病院のリハビリテーション室共に出身校を超えてリスペクトし合う抜群のチームワークです。

未来の自分に宿題を。

ためらわずに動き出す、手を挙げる、が渡邊さん流。動くほど知見、経験、人脈が広がっています。職場でも、院内と訪問の兼任は自らの希望でしたし、責任あるポジションには積極的に手を挙げてきたといいます。

研究活動は現在2つのテーマで進行中です。1つ目は北海道リハビリテーション専門職協会がメンバーを募った研究チームで取り組むもので、高齢者の主観的健康感の高さ（自分はどの程度健康だと思うか）と実際の健康状態の関連を既存のデータベースを基に視点を変えた分析で探るものです。“気持ちが健康な人ほど体の健康も保ちやすい”というイメージに科学的に迫ります。2つ目は日本リハビリテーション栄養学会のガイドライン作成です。同窓生から声がかかって飛び込んだプロジェクトで年内のゴールへ向けて邁進中です。

「未来の自分に宿題を出す」ことでモチベーションを維持しているという渡邊さんがいま学会発表のほかに抱える大きな宿題は論文です。研究チームの先輩のアドバイスを受けながら取り組もうとしています。

「好き」を味方に。

充実の臨床活動とプライベートな時間を使う研究活動の両立は正直きつくないのか尋ねると「この仕事は自分に合っている。本当に好きです。一緒に楽しく働ける同僚とチャンスをくれて意欲を後押ししてくれる上司のいる職場も好き。好きなことを好きな環境でできるって最高ですよ」とポジティブなお答え。では、両立で得られるやりがいは何でしょう。「利己的に聞こえるかもしれませんが、いまは自分の成長を実感できることが一番です。この先、私の成長が患者さんのためになり、私の出す成果がよりよいリハビリテーションの提供につながっていけば、やりがいはさらに大きくなるでしょうね」。

がつがつしたところがなく自然体の渡邊さん。すでに後輩の目には十分かっこよく映っているはずです。

訪問リハビリテーションでは管理者を務めます。「スタッフが楽しく働いて成果を残せる、そんな職場をつくりたいです」